

項目	自己評価	中・長期経営目標	短期経営目標	主な取組内容	取組内容の評価指標	達成状況	改善方策	学校関係者評価	学校関係者評価	
確かな学力	A	○各指定事業を効果的に利用し、指導主事等の指導を仰ぎ、授業改善を行い学力向上につなげる。 ○インクルーシブ教育システムを目指し、全体の層を上げる。 ○全国（県）の学力調査において平均正答率を3ポイント上げる。	①全国学力学習状況調査、県版学力調査等において、正答率を27年度より引き上げ、無回答率を下げる。 ②生徒や保護者に学力が定着していることを実感させる。 ③思考や表現の場を授業中に取り入れ、探究的な取り組みを行い、教科の本質に迫る授業をする。	学力向上のための組織的な校内研修体制づくり	①学力向上推進モデル校事業と連携し、校内研の質を高める。 ②全国及び県の学力調査の分析及び授業改善をすすめる。 ③国語科のTTでの授業方法を研究し、より高い手立てを行う。 ④数学科では分割授業を行い少人数、習熟度別学習で学力向上を目指す。	①各担当主導の校内研の実施ができた。 ②全国学力調査において、数学科では全国と同等、国語科では飛躍的な成果を取ることができた。 ③国語科のTTでの授業改善を推進することができた。作文等の各コンクールで入選・入賞を多く果たすことができた。 ④数学科における分割、習熟度別授業の形態を定着させることができた。	①来年度も継続して学力向上に係る指定を受け、研究推進に努めたい。 ②全国学力調査において、数学科では全国と同等、国語科では飛躍的な成果を取ることができた。 ③国語科、数学科においては一定の成果を上げることができた。来年度も継続し、更にステップアップを図る。	昨年度の課題改善及び取り組みの成果は、評価に値する。特に全国学テの成績向上は特筆すべき成果である。教師が一丸となった取り組みの表れである。次年度に向けた課題として、以下に記す。 ・研究指定の事業を消化できていないのでは ・教科によっては授業改善が必要（理科・社会）	A	
				子どもにわかる授業づくり（授業づくりスタンダードの活用など）	⑤小集団やICT機器を活用した、コミュニケーションのある授業実践を進め、活気ある授業を行う。 ⑥ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を研究・推進する。 ⑦授業を工夫し、評価をもとにした改善サイクルを図る。	⑤小集団を使い授業に、高め合う場面が設定されている。 ⑥学校評価アンケートで「授業が分かる」「学力が定着している」の肯定群を生徒80%以上、保護者70%以上にしている。 ⑦生徒アンケートでの「先生は授業を工夫している」で肯定的評価90%以上にしている。	⑤電子黒板やプロジェクター、タブレットを使用している授業を行い、協働的な学びを実施できた。 ⑥学校評価アンケートで「授業が分かる」「学力が定着している」の肯定群が一回目→二回目で生徒83.0%→90.6%、保護者64.6%→55.3%だった。 ⑦生徒アンケートでの「先生は授業を工夫している」で肯定的一回目→二回目で評価87.2→95.3%であった。			⑤ICT機器の利用の研究を継続して分かる授業を目指す。 ⑥生徒への学力定着感、高い。来年度も継続して授業改善に努める。保護者の評価との差があるので授業や学力についての説明や働きかけを行いたい。
				学校全体で予習・復習（宿題）の質と量を高める取組	⑧家庭学習・意識調査（年2回） ⑨予習・授業・復習のサイクル（黄金サイクル）が見える授業づくり	⑧宿題・自主ノートの提出率が95%を超える。 ⑨家庭学習に関するアンケートで提出率が向上した。	⑧毎日の詰めを行うことで、結果としてほぼ全員が提出できている。 ⑨学校評価アンケートの生徒への「家庭学習ができていますか」の設問で、一回目→二回目77.7%→84.7%であった。			⑧継続して指導を行う。
豊かな心	B	人間関係づくりスキルを授業に取り入れ生徒理解や生徒同士が関わり合う機会を意図的に増やし、「いじめ」を生みださない学校づくりをすすめる。	①毎日の出欠状況の把握と登校に向けての早めの取り組みを行う。 ②学校や学級に自分の居場所があり、安心して学校生活が増やし、「いじめ」を生みださない学校づくりをすすめる。 ③円滑な人間関係を築き、目標意識の高い生徒を育成する。	①不登校対応教員を配置し、出欠状況を共有し、日々の手立てを行う。 ①別室対応に時間割を設定し、全時間教職員が対応できるようにする。 ①特別支援コーディネーターを複数名配し、ケース会や相談活動等、早期の対応を充実させる。 ②学級担任を複数配し、保護者や生徒の多様なニーズ、相談などに対応する。 ③Q-Uを年度6月と12月に実施し、学校生活満足群を増やし自尊感情を高める。 ③保・小・中・高の18年間を見据えた発展性、系統性のあるキャリア教育の推進 ③清掃活動を縦割り班とし、関わりあう集団を多様なものとし、コミュニケーション力を向上させる。 ③キャリア教育評価アンケートの実施・分析	①30日以上欠席の生徒を0名にする。 ②Q-Uにおける要支援群を0名にする。 ③キャリアアンケート・自尊感情に関するアンケートで肯定的評価80%以上にしている。	①不登校傾向の生徒を0名にすることは、敵わなかったが、昨年度の不登校傾向生徒8名のうち、6名は改善傾向にありうち3名はほぼ登校できるようになった。 ②Q-U要支援群一回目→二回目は、5→4と減少させることができた。二回目の4名も得点的には改善傾向にある。 ③キャリア教育・総合的な学習の時間の見直しを図ることができた。 ③キャリアアンケート・自尊感情に関するアンケートで肯定的評価が38.1～72.9%で平均53.3%であった。全国学力調査生徒質問紙での肯定的評価は81.2%であった。	①継続して支援を行う。 ②要支援群のや学級生活不満足群の生徒への支援を引き続き行うとともに、仲間づくりプログラムを引き続き実施する。 ③キャリア教育・総合的な学習の全体計画の見直しを行い、修正加筆をする。 ③継続して指導を行う。 ③縦割り班等関わりあう集団の多様性を活かした取り組みを行う。	昨年度の課題改善及び取り組みの成果は、総合的な学習の取り組み等、一定評価できる、次年度の課題は以下に記す。 ・複数担任が十分に機能しているとはいえないため改善が必要 ・家庭への指導が必要	B	
				基本的な生活習慣を確立をめざす。	①授業でかわりを持たせるプログラムも積極的に入れ、体育が好きな生徒の割合を向上させる。 ②新体力テストのD及びE評定の生徒の割合を男女共減少させる。 ③生徒自身が規則正しい生活が出来るようにする。 ④食事と生活・健康について正しい知識を獲得し、行動化できる生徒を育てる。	①体育の授業は、2・3年生は男女別習で行う。1年生は合同TTで行い、単元により別習とする。授業評価を生かし、具体的に授業を改善する。 ②体育の授業で新体力テストの内容を、準備運動に取り入れる。 ③キャリアノートを使用し、生活習慣の確立（就寝時間・食事）する指導を行う。 ③学校便りや学年便り、保健便りを通じて、保護者に対して生活習慣に対する意識を高める。 ③特活の時間や専門家による講演・ワークショップ等を通じてTVやスマホ・PCに費やす時間を学習や他の活動に充てる。 ④家庭科の学習や給食指導をとおして、食に対する意識を高める。	①アンケートで体育が好きな生徒が90%以上にしている。 ②新体力テストのD及びE評定の生徒の割合を男女共に10%以下にする。 ③朝食を食べる割合が100%になる。 ③TVやスマホ・PCに1日2時間以上費やす生徒の割合を30%以内にしている。 ④給食時に献立に関するコメントを放送する。 ④栄養バランスを考え、自分で調理をする生徒の割合を60%以上にしている。			①新体力テストのアンケートで運動・スポーツが好きと答えた生徒の割合は、男子90%、女子68%であった。体育の授業が楽しいと答えた生徒の割合は、男子91%、女子80%であった。 ②新体力テストのD及びE評定の生徒の割合は、男子27%、女子6%であった。 ③朝食を全く食べない生徒の割合は0%、あまり食べない生徒の割合は1%（1名）であった。 ③TVやスマホ・PCに1日2時間以上費やす生徒の割合は50%が高かった。 ④給食時のコメントの放送は毎日行うことができています。 ④コソコソ青春講座や「お魚やさんがやってくる」等地域や市・県の事業とタイアップしながら調理実習を行うことができた。 ④業務発令の栄養教諭による、給食指導を受けることができ、食への関心を高めることができた。
健やかな体	B	生徒が人間性豊かに成長するための条件整備を共に行い、お互いが成長しあう関係を築く。	①学年世話人や学年PTAとの連携が図れている。 ②保護者の意識改革と交流が深まっている。 ③家庭学習の充実と保護者や地域も協力的である。	①保護者の参加率を高めるための、保護者が企画、運営する行事の設定。（学P行事…父親との交流など） ②学年懇談会の実施、日常の家庭訪問、アンケート等の実施。 ③家庭での学習チェックほか、協力の要請をしながら啓発を図る。 ④家庭への情報発信（たより、学校HP、携帯サイト）の充実。	①学P行事など、保護者との交流の機会をも持つことができた。 ②参観日や行事への参加率を60%以上にしている。 ③市のコラボアンケートで家庭学習に関する設問への肯定群が半数以上となる。 ④家庭や地域に情報発信（毎週の学年通信、毎月の学校だより、学期に1回のPTA広報、HP随時更新）ができた。	①学P行事など、保護者との交流の機会を持つことができた。 ②日曜日や祝日の参観日や行事への参加率は高かったが、平日の参観授業への参加が少なかった。 ③市のコラボアンケートで、「宿題や家庭学習をやったことを確認してくれる」という設問への肯定群が59%であった。 ④学校だよりは隔週で発行、HPの更新など積極的に情報発信を行うことができた。	①②③④継続して取り組みを行う。 ①②引き続き参加を呼びかけていくとともに魅力ある行事等を実施する。	昨年度の課題改善及び取り組みの成果としては、一定の評価ができるが、保護者の価値の多様化により、新たな取り組み、仕組み作りが必要だ。次年度に向けた課題は、コミュニティスクール設立に向けてさらなる連携を深めることだ。	A	
				○特別支援教育の理念を理解し、生徒間の交流を増やし、お互いを尊重し合える集団作りと、将来の社会生活にも生かせる、行動化できる生徒を育てる。	①特別支援教育の専門性を共有し、個に応じた的確な教育がなされている。 ②日常生活を見なおし、生活の中に見られる矛盾や不合理をなくしていこうとする意欲が育つ。	①小中連携のもと、情報の交換や生徒の交流を図る。（ユニバーサルデザイン：以下UDプロジェクト研修など） ①各種の障害に関する理解と対処方法などの研修を深め、共通理解を図り取り組みを進める。 ①職員会では、生徒理解の内容を必ず入れ、職員間の共通理解を図る。また、ケース会・支援会では、本校担当のSCやSSWにも参加を依頼し、専門的な見地からのサポートをもらう。 ②UDのある授業を研究し、できるだけ障害を感じない授業を研究する。	①小中の情報交換と課題の共有のための連絡会が実施できた。 ①児童生徒の交流の機会を持った。 ①特別支援教育に焦点をあて、スパー・アドバ・イザ-を招聘した校内研修（事例研究）を実施した。 ①ケース会・支援会等には生徒指導、SCやSSWが参加した。 ②授業では、常にUDのある授業を行った。			①生徒会と大宮小学校の児童会と共同であいさつ運動を行うことができた。 ①小中の情報交換と課題の共有のための連絡会が実施できた。 ①大宮小学校と合同研修を行うことができた。 ①特別支援教育に焦点をあて、スパー・アドバ・イザ-を招聘した校内研修（事例研究）を実施した。 ①ケース会・支援会等には生徒指導、SCやSSWが参加した。 ②UDのある授業を行う事ができた。
特別支援教育	A	○特別支援教育の理念を理解し、生徒間の交流を増やし、お互いを尊重し合える集団作りと、将来の社会生活にも生かせる、行動化できる生徒を育てる。	①特別支援教育の専門性を共有し、個に応じた的確な教育がなされている。 ②日常生活を見なおし、生活の中に見られる矛盾や不合理をなくしていこうとする意欲が育つ。	①小中連携のもと、情報の交換や生徒の交流を図る。（ユニバーサルデザイン：以下UDプロジェクト研修など） ①各種の障害に関する理解と対処方法などの研修を深め、共通理解を図り取り組みを進める。 ①職員会では、生徒理解の内容を必ず入れ、職員間の共通理解を図る。また、ケース会・支援会では、本校担当のSCやSSWにも参加を依頼し、専門的な見地からのサポートをもらう。 ②UDのある授業を研究し、できるだけ障害を感じない授業を研究する。	①小中の情報交換と課題の共有のための連絡会が実施できた。 ①児童生徒の交流の機会を持った。 ①特別支援教育に焦点をあて、スパー・アドバ・イザ-を招聘した校内研修（事例研究）を実施した。 ①ケース会・支援会等には生徒指導、SCやSSWが参加した。 ②授業では、常にUDのある授業を行った。	①生徒会と大宮小学校の児童会と共同であいさつ運動を行うことができた。 ①小中の情報交換と課題の共有のための連絡会が実施できた。 ①大宮小学校と合同研修を行うことができた。 ①特別支援教育に焦点をあて、スパー・アドバ・イザ-を招聘した校内研修（事例研究）を実施した。 ①ケース会・支援会等には生徒指導、SCやSSWが参加した。 ②UDのある授業を行う事ができた。	①②継続して取り組みを行う。 ①異動発表の後、留任教員全員が小学校との引き継ぎ会に参加する。	昨年度の課題改善及び取り組みの成果としては一定の評価ができる。特に小学校との連携が良く取れていると感じる。次年度に向けた課題としては、生徒の個性を伸ばすような支援教育を望む。また、改善の方策を具体的に（PCDAサイクルを機能させるように）示す事が重要である	A	